



ジェントリフィケーションとヌーベル・キュイジーヌ

Zukin, Sharon

森, 正人(訳)

松田, いりあ(訳)

(Citation)

社会学雑誌, 21:108-126

(Issue Date)

2004-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011019>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011019>



ジェントリフィケーションとヌーベル・キュイジーヌ

シヤロン・ズーキン

森正人・松田いりあ 訳

本稿は、Sharon Zukin *Landscape of Power: From Detroit to Disney World* (University of California Press, 1991) の第七章前半部を訳出したものである。著者シヤロン・ズーキンは、現在ニューヨーク市立大学の社会学教授の職にある。本書は彼女の名前を広く世に知らしめた『ロフト・リヴィング *Loft Living*』に次いで発表され、C.W.ミルズ賞を受賞した(同賞の受賞者には本誌十五号で紹介のT.スコッチホルグがいる)。

ここでのズーキンの議論は、一九七〇年代以降のグローバル経済の再編を背景に、ニューヨーク市という種別的な都市を取り上げて、資本主義の経済的権力が文化的権力とどのように節合・存続し、またローカル文化を奪用しようとする中心の文化的権力がその過程でそれ自体いかなる変容を遂げたのかという点に光を当てる。土地利用をめぐる階級闘争としてのジェントリフィケーションが、同時にアーティストやレストランのシェフをはじめ、さまざまな文化的価値の生産・伝達者を巻き込んで展開した闘争でもあったことを明らかにするのである。これらの文化的価値の伝達者たちについては、後半部(次号掲載予定)で登場する「クリティカル・インフラストラクチャー critical infrastructure」の記述に詳しい。ジェントリフィケーションの主要な担い手である彼

らは、ブルデューが『ディスタンスシオン』において「新しい文化仲介者 new cultural intermediaries」として描き出した人々と同様に、文化的価値を消費の対象にして経済的権力と結びつくまさにそのとき、彼らに固有の需要をも作り出すことに成功しているのである。

本稿の原題は 'Gentrification, Cuisine, and the Critical Infrastructure' であるが、日本語に直訳した際の冗長さを避けるため、内容を考慮しつつ「ジェントリフィケーションとヌーベル・キュイジーヌ」とした。なお本文中の () は原註、「」は訳註を、傍点はイタリック体であることをそれぞれ示している。また原文には本稿で(1)〜(3)とした註以外にも、引用文献の指示を中心とした註が巻末に付せられているが、紙幅の都合からここでは省略している。

訳出については、森正人(三重大学人文学部専任講師)と松田いりあ(神戸大学大学院文化学研究科助手)が共同で行った上で、都市論に関する用語を中心に大城直樹氏(神戸大学文学部助教授)と加藤政洋氏(流通科学大学商学部助教授)からご教示をおおぐことができた。もちろん訳出の責任はすべて二人の訳者にあることはいうまでもない。

(松田いりあ)

今年で、ヌーヴェル・キュイジーヌが終つてやれやれという感じです。あれは食べ物などではありません。見た目を楽しむ風景なのです。

インテリア・デザイナーのアンドレ・プットマン

『ニューヨーク・タイムズ』

一九八七年二月三一日付。

陪審員選任のとき、彼は彼女がマンハッタンプリシユカー&ボルカ広告エージェンシーのアート・ディレクター——一種のデザイナーのようだった——であることを彼女の口から聞き出していた。クレイマーにとつてそれは口では言い表せないほどの、まばゆい生活だった。なめらかな真つ白の壁とガラス・レンガ「グラス・ブロック」のオフィス……MTVのオフィスのような……そこでテープに入れたニューウェーブの音楽に合わせてきびきび動きまわっている美しい女性たち……明るい色の木と真鍮と間接照明と山形紋をあしらったすりガラス張りのレストランでの豪勢な昼食や夕食……サツマイモを敷き、油でいためて煮つけたひだえり状のタンポポの葉の上のせたアンズタケ添えのウズラ肉……そのすべてをはっきり思い浮かべられた。

トム・ウルフ『虚栄の篝火』（中野圭一訳）

近年では、中心都市から外へ経済力が広がっていくことだけが、新たな権力の景観が創出される唯一のプロセスで

はない。中心部の建造環境にもまた、経済の成長と停滞というそれぞれの契機——合衆国の製造業の衰退とビジネスサービスの成長——が刻み込まれている。投資の不均等な増加と減少は、特定の空間を創造的破壊のために「解放」しつつ、それ以外の空間をより濃密でより高度でより新しい、そしてより贅沢な建設へとせき立てている。都市中心部ほど構造の変容とビジネスのサイクルをはっきりと示す景観は存在しないのである。近代都市の中心的イメージや中心性のイメージのため、ダウンタウンは経済的価値と文化的価値がパラドキシカルにせめぎあう場でもある。同時にそれは、開発が行われたり、逆に投資の引き揚げが起こったりという象徴的な切断面を、物質的な形態で示しているのだ。

現在、ベッドタウンに企業のビル群が出現しているように、多くのアメリカの都市におけるダウンタウンは、過去五〇年に築き上げてきた多くの社会的・空間的前提条件に異議を申し立てるという意味の反転を経験している。しかしながら多くの都市近郊とは異なり、ダウンタウンは手つかずの土地ではない。建物が密集し、いくつもの歴史的層が重なっているダウンタウンは「都市のジャングル」なのだ。そこでは、その社会的多様性というオルタナティブなイメージに、経済的権力の文化的ヘゲモニーが対立する。ダウンタウンの各部分は、全体を代表するとはいわないも

の、他の部分を説明する、すでに凝集した景観なのである。エスニックゲッター、金融街、百貨店、市庁舎、どや街。それぞれは単独で自律的な展開を示しているものの、全体としては単一の景観の特徴を呈している。そしてその価値は見方や考え方にともなって多様化するのである。

「山の手」から見ると、ダウンタウンは商取引、市場文化、高層ビル、そして「白人男性」が働く昼間の領域である。しかし——今日われわれが空港や高速道路から都市に入るとき——スカイラインとして眺めてみると、ダウンタウンは都市それ自体と同義である。それが物質的な景観であるのか、象徴的な表象であるのかということにかかわらず、ダウンタウンはその中心における権力の主張を正統化している。脱産業化、企業の脱中心化、そして不動産開発は近年のダウンタウンの創造的破壊のもとである。しかし「本書第六章で取り上げられたニューヨーク市郊外の」ウェストチェスター郡とはちがって、それらはこれまでとは異なってみえる新たな景観を作ろうとして互いに働きかけあっているのではない。そうではなくて都市景観に対する新たな見方や考え方を押しつけているのだ。それらは断片的なダウンタウン固有のものを、文化的権力を基盤にして、首尾一貫した景観へと統合していく。そしてこのときに、創造的破壊のプロセスは、生産と消費の新たな編成、中心部での権力の再編に関わっているのである。

都市のイメージはつねに、ダウンタウンの地理的中心性とその経済力の集中——もしくは消失——という関係と格闘している。建築学から、社会学や地理学といった都市研究の中心的分野にいたるまで、都市を定義しようとする研究者たちは、中心性が社会支配の空間的な類型であると想定しがちである。ジェントリフィケーションの場合、このことはその背後にある社会的権力によってしか確認されていないように思われる。つまりジェントリフィケーションは、一九七〇年代に始まった、都市の中心に存在する経済的に周縁にある労働者階級地区から中産階級の居住地区への転用だとされるのである。

権力の景観としての中心性

二〇世紀を通じて、近代都市に関する記述は、中心性と権力の緊張関係を強調してきた。正統派の生態学「シカゴ学派」は空間的集中を議論の余地のない社会的事実としてとらえたのに対して、都市論者はそれを逆説と矛盾の源泉としてとらえたのである。

二〇世紀最初の三〇年ほどに、地理学者たちは都市や地域において顕著に見られるものの空間的パターンを説明するため中心地理論を展開した。規模、密度、経済的機能の点から都市をみることで、この理論は中心核から外側へと

等しく拡がる空間的ヒエラルヒーを描いた。中心地論者は社会的プロセスを無視して、機能的に優勢なもの構造を形成・再形成してきた都市間の市場や準市場を重視する傾向があった。したがって彼らは中心的権力の社会的公正を検討することもなかった。対照的に一九二〇年代にシカゴ学派の都市社会学は、象徴的権力と物質的収奪という観点から中心都市を生き生きと定義したのである。それらの都市——とくにシカゴ——における経験的調査は、社会の底辺の人々についての民族的報告と、それを俯瞰する報告を並置したのである。シカゴの社会学者たちは自身の「生態学的」環境の中で「都市の諸類型」を描き出した。すなわち、底辺の人々の集団は通常の社会的規範からは逸脱すればするほど、都市の文化的・地理的中心へとより接近し、逆に経済的権力からは一層離れてゆくのだった。しかしながら、文化と権力——つまりアーバニズム——は中心から放射状に拡がるとされた。

これらの社会学者たちはシカゴの地誌をもとに、一連の同心円として、景観と土着のものの対照関係を視覚的に表わした。ふたつの同質の景観——高地代とアメニティ、ダウンタウンと富裕な郊外の豪邸——の間には、黒人地帯、リトルシシリー、チャイナタウン、ドイツ人社会、ユダヤ人街、貯蔵倉庫、工場、下宿屋地域、鉄道線路が存在する。資本が外側へと流出するにつれ、ダウンタウンの要塞は、

遠方からとはいえ中心が支配しようとした土着の地帯に取り囲まれているというわけであった。

世界大恐慌と第二次世界大戦の後、都市史家ルイス・マンフォードは中心性の矛盾に対して鋭い批評を展開した。シカゴ学派と同様に、彼は近代都市におけるアーバニズムと資本主義、もしくは近代都市に集中した社会的権力と中心化された経済システムの権力を区分せず扱った。シカゴ学派はドイツの社会学者ゲオルグ・ジンメルが「その巨体の崩壊や機能停止のことは言わないとしても、形態の喪失は、自律性の喪失、日常生活にたえずつきまとう欲求不満や困惑——すべてこういったことがらが大会体制にみかけられる普通の特質となっている」としたものを受け継いでいたが、マンフォードもまた、そのような都市生活の人口過剰や過活動性にたいする軽蔑を示した。しかし、「生活必需品の充足にはなく、利潤を上げること」に専念する「膨張経済」に対して一層批判的であったマンフォードは、「新しい都市のイメージ、つまりたてつづけの宣伝や広告の圧力に応じて、増加する工業製品や農産物を消化しつつしながら、年がら年じゅう活動しつねに拡張している胃袋」という都市のイメージを蔑んでいた。新しい技術は、都市のこうした貪欲さを克服する力をもたらした。しかしマンフォードは、経済的権力のうちに都市中心部がもつ多様性と邪悪の根源の両方を見いだしていた。すなわちそれは

生産と消費双方にとつての機械であり、そこでは享樂が社会的規制と結びつけられていた。それゆえにマンフォードは、彼自身「歴史上先例がない」と考えた中心性の権力に對峙したのである。つまり「大都会という容器はすでに破裂してしまつたが、いぜんとしてその制度は人々をひきつける原初の権力を大いに保持している」のであつた。

マンフォードの折衷主義的な観点は、都市についてのラディカルな見方であると同時に、その後の生態学的な考え方の概要も示している。一九五〇年代以降、都市研究の主流であつた都市生態学は、周辺地域の権力を枯渇させる都市中心の能力を強調したが、実際には居住者が郊外に逃亡し、製造業者たちも中心を離れていったのである。郊外化を脱出という単純なプロセスとしてとらえてしまつたため、生態学者は——都市郊外、遠隔地、海外への投資によつて生じる——中心権力の複雑な減衰の過程をとらえ損つたのである。彼らは、そのときに現実の都市中心を支配していた、景観とその土地固有のものとの間のイデオロギー闘争を考慮することもなかつた。一方で、中心における物質的景観は、かなり小規模の高級なダウンタウンと、人種的・民族的マイノリティが居住する物理的に荒廃した低地代のインナーシティの拡大という形ではっきりと分断されていた。他方で、象徴的景観は、都市の生産的中心にある労働のためのダウンタウンという公的な世界を、郊外における家族、

子供および世帯消費という私的な世界から分離させたのである。

これらのイデオロギー的分断は、ラディカルな社会批評家の関心をよんだ。一九七三年以降、彼らが描いた「都市の闘争」は、都市居住者の健全性に対する特定のそして日常的な攻撃だけでなく、近代資本主義システムのもとで生じる経済的・文化的価値の全般的な分解にも関わつていたのである。都市の住宅供給と労働市場における断絶は、家族、ジェンダー、人種、コミュニティを含め、場所に関わる社会的諸制度に影響を及ぼしていく。そして都市の闘争の多くは、空間利用と関わつていたのである。もし都市が市場経済の社会—空間的基盤であるとするならば、それらの空間的構造が絶えず生産されることにより、経済的・政治的システムの社会的公正は破壊され再創造されるのである。このような中心性は争点とされることがない。しかし空間において——財産権、地代、ゾーニング法、交通システムや、他のより象徴的な管理の形態によつて——構築される社会的排除とヒエラルヒーは、中心の位置がもはや単なる人工物などではないということをはのめかしている。郊外と同様にそれらも入念にそして巧みにつくられた景観なのである。

支配的な経済的制度は、フランスの社会学者アンリ・ルフェーブが「抽象空間」と呼ぶものを生産することによ

り、中心にその痕跡を印づける。この空間は投資、大企業本社の立地、政府お墨付きの計画によって輪郭を与えられ定義されるのだ。それらは、なじみある「資本蓄積のゆりかごであり富の場であり歴史の主体であり歴史空間の中心」を解体することにより、都市をさんざんな目にあわせ支配する。マンフォードと同様に、ルフェーブルは群衆と商業、光景と行為といったものが歴史的に集中したものとして中心都市をとらえた。そして一九七〇年代の記述では、彼は経済的権力が都市に集中する中で隠されている緊張関係を暴き出した。すなわち『都市の空間領域』について語ることは、中心と中枢性「中心性」について語ることである。この中心と中枢性が現実的なものであるか、潜在的なものであるか、飽和状態にあるか、破壊されているか、攻撃を受けているかといったことはさほど重要ではない。われわれがここで語っているのは弁証法的な中枢性なのである。中心性の矛盾は経済的・政治的権力の蓄積に根ざしているわけだが、ルフェーブルにとっては、都市空間の断片化こそが主たる矛盾であった。それは個別的存在であると同時にうんざりするほど変わりばえのしない断片化であり、ゲッター化されていると同時に均質な断片化であった。こうした断片化が一九七〇年代までの大半のダウンタウンがおかれた状況であった。しかしよりあからさまな経済的解釈によると、中心的な都市空間における成長と衰退といった

現象は資本蓄積のプロセスと直接的に関係している。デヴィッド・ハーヴェイがしばしば描き出してきたように、都市の形態と空間を通して作用する経済的価値は、創造と破壊を同時に生じさせようとする。経済的諸価値は、都市の地理的中心において、永続的・潜在的に最も高い位置を占める。しかしこれらの価値はしばしば、「非生産」の利用——銀行、政府機関、駐車ガレージ——によって消耗される。この非生産的利用によって、土地持ちのエリートによる贅沢な要求に応えたり、逆にそれを巧みにかわしたりする。このように、ハーヴェイの考えでは、中心地の野放図な利用が、その価値を決定するのではない。むしろ土地利用は価値の変化に追従するものなのである。中心地での投資に対する見返りが他地域を下回るとき、郊外で新しく建設が行われたり、高級なテナントが郊外へと移転したりする。中心地での資本の経済的価値が周期的に下落すると、権力の景観としては、それは一時的に放棄されるのである。

投資の地理的な移動は、資本の社会的・空間的中心化に並行する。一方で、特定の小さな空間的クラスターに投資を集中させようとする経済アクターはまれである。他方で、都市中心部への投資の集積は、彼らの社会的権力が集中していることを反映している。しかし一九七〇年代半ばまで、ダウンタウンは社会的利用と経済的価値のPATCH・ワークのままであった。ダウンタウンには以下のものが含まれて

いた。過去からの資本投資の集中的堆積。経済的価値の喪失に対して——しばしば公的に保証された都市の再生の保護のもとで——次の利用を待つ空地。また局所的・没落的・伝統的な民族に利用される低地代の地区。これらは経済的権力の景観からは排除されたのである。

ダウンタウンの景観

マンハッタンとブルックリンの間に流れるイーストリバーをマンハッタン橋で横断する高架になった地下鉄からの光景ほど、集中と排除、権力と土着のものの弁証法が可視化されているところはない。その橋は二つのダウンタウンをつないでいる。かつては独立した都市の中心だったダウンタウン・ブルックリンと、一八九八年の合併によりブルックリンを吸収したニューヨーク市の中心であるダウンタウン・マンハッタン。その外観から、これらは景観と土地固有のものに関する全く違った光景になっている。

自由の女神に向かって橋のマンハッタン側には、鉄とコンクリートとガラスで出来た高層ビル群があり、それらは二〇世紀金融の重層的なパノラマを作り上げている。ウールワースビルの新ゴシック様式の尖塔——一九一三年に完成した時点では世界でもっとも高い高層ビルであった——は、一九六〇年代を通じて地球的規模で拡張したウォール

街のために建てられた巨大な四角いだけの近代的ビル、世界貿易センターを優美に指し示している。これの横にはその半分の高さ程度の世界金融センターとバッテリー・パーク・シティの巨大なポストモダン建築があり、これらの装飾的なマンサード屋根とへこみはその周りにわずかに残った雲と空の隙間をふさいでいる。

地下鉄は地面から急速に出てくるため、列車から見てみるとより小さなビル群は前面にぬっと現れる。イタリア系とユダヤ系の移民のために一八八〇年代に建てられた、「現在では」チャイナタウンの赤レンガの住宅群は、今なお活動的な移民の存在感を示している。列車の窓は中国系移民の経営する衣料品店街に面していて、その下方の街路は、緑のキャベツやネギ、あるいは紫のナスやオレンジの屋台で溢れかえっている。高架の線路と街路にかかった赤い文字の横断幕の間にあるファースト・チャイニーズ・プレスビテリアン教会の灰色と白色の切石のファザードは、不釣り合いなほどにぼんやりとしている。

中景はマンハッタンの活気あるウォーターフロントの最初期の名残をとどめている。かつての鮮魚商の港のオフィスは、最近では岸壁の魚市場の客で夜明け前にぎわうスウィーツ・レストランやスロッピー・ルイズになっている。シャーマホーン・ロウにあるパステルカラーで塗られた一八世紀のこれら建物は、部分的には「修復」されてはいる

ものほとんど空家のままで、ウォーターフロントの商業的再生にむけ新たな店舗やレストランの出店を待っている。橋の中ほどから見ると、それらは人形の家のようだ。

サウス・ストリート・シーボートの赤レンガのショッピングセンターに面する、商業で栄えた時代のこういっただ遺物は、巨大なウォール街のためにひどくちっぽけに見える。夜にはパートタイム労働者や清掃業者がいるために明かりの点いているダウンタウン・マンハッタンのビルは、暗闇に大きな電子チェス盤のように浮かび上がっている。

川のブルックリン側は、赤レンガの空の倉庫群と、棧橋に沿って立ち並ぶ明るく彩色されたいくつかの建物によって護られている。マンハッタンの経済的権力を内に秘めた景観とは対照的に、この「川向こうの都市」の入り口には、「ブルックリンは活きている！」と書かれた赤・白・青の看板がある。ここではイースト・リバーの波が以前のドックの面影を示す腐った支柱にパチャパチャと打ち寄せている。川に面した人気がない街路にある一二階建ての荘厳な時計塔は、ニューヨーク州労働局の事務所へと改修された大きなロフトビルの目印になっている。時計塔の隣のビルには「Sweeney Manufacturing Co./Nickel ware... Hardware」といった伝説が描かれたままである。かつて商業を営んでいたロフトビル群の一角に地下鉄が突入していくとき、後方にちよっとだけ見えるのは、この地区が

「ランドマーク・ウォーターフロント・ビジネス地区」へと将来的に変わっていくのを予告する巨大な屋上看板である。まもなくわれわれはブルックリンのウォーターフロントにダウンタウン・マンハッタンのレプリカを目にするようになるだろう。それは中心的な権力のイメージが外側へと向かっていく動きなのである。

空間は可変的であるため、デヴィッド・ハーヴェイがいう「中心性の前提」は事実ではない。それは社会的プロセスであり、中心化された経済的・政治的権力の空間的押し付けであり、さらに使用と価値の問題含みの関係なのだ。しかし中心性は文化的プロセスをも明らかにする。もし建築物が権力を抽象化することができるのであれば、実のところダウンタウンの建造形態——こぎれいであるとか、密集しているとか、高層であるとか——は、ますます度を越して行われる資本投下や、投資決定の権力が異常な集中をみせていることを具現しているのだ。また、ダウンタウンの摩天楼は、現在を過去から分断している。それらの垂直性は、かつての水平な市の典型に取って代わり、景観と眺望の変化を押しつけた。その足下では、中心地の敷石そのものが「文明化」とその衰退の両方を告発している。切り出された石がアスファルトへと変わり、また路面電車が走っていたスムーズな路面が穴ぼこだらけになるほどに時間が経つと、街路は中心部の創造的破壊にまつわる記憶を

持つようになるのである。

ダウントウンは、事実上またイメージのうえでも、具体的な成果と場所への感傷的な愛着に関わる集合的記憶である。(世界的みれば北米の諸都市は相対的に新しいとはいえず)それは不断の定住の最古の年輪を示しており、それぞれの時代で最も高い建築物が建てられた場所を表している。都市の中心性は歴史との空間的リンクであると同時に、経済的・政治的権力との時間的リンクでもある。個人はこの景観の中で特別な位置を占めている。ある人々にとっては、ダウントウンは同族会社や家産の連続性を表象している。その場合には、中心性とは、都市の主要な文化団体をサポートしたり、またしばしば都市の最も広大な土地を所有するかなり富裕な家族の一員であることを意味するだろう。またもっぱら中心地から富を得ることを喜びとする者もいる。この場合には、中心性は恐ろしい権力を発揮するのである。ジョン・パージャーが書いたように「資本主義の歴史において、マンハッタンは、多くのものを望みすぎたために断罪された者たちに残された島なのである」。

一九六〇年代末から七〇年代初頭以来、投資家の関心はこの地獄絵図へとつきりと移ってきた。マンハッタンだけでなく、フィラデルフィア、シカゴ、ボストン、そしてそれより小さな諸都市の多くのダウントウンが、商業的な土地開発によって、またタウンハウス、コンドミニウムや

ロフトビルが新たに住宅として所有されることによって再編されていった。それどころか、ダウントウンは創造のメッカになったのである。これは従来からボヘミアンのライフスタイルを追求する人々が細々と行ってきた活動が命脈を保っているというよりも、その規模の拡大、特定のダウントウン地区において主要な文化団体との協働による整理統合、さらには文化的イノベーションをマーケティングすることによってその植民地化が生じていることを示している。ジェントリフィケーションとは、この社会・空間的再編の一部なのである。ジェントリフィケーションによって、ダウントウンへ移住しそこに投資するということは、「郊外に住む」伝統的な中産階級から距離を置くことであると同時に、権力への欲望を表している。ジェントリフィケーションとは、ダウントウンの中心性を奪還し、それを消費することにより、その経済的・文化的価値を高めようとする企てなのである。

市場と場所としてのジェントリフィケーション

ジェントリフィケーションは、いくつかの意味合いで空間の大規模な再編と関連している。それはまず、しばしばインナーシティを犠牲にして、ダウントウンの物理的領域が拡張することを示している。あまりはつきりしない形で

ではあるが、それはダウンタウンの文化的権力が地理的中心からその外側へと伝播していくことをほめかしている。とどのつまり、ジェントリフィケーション——純粹にローカルなアイデンティティを再主張しているように思われるプロセス——は、国際的な市場文化によるダウンタウンの社会的変容を表しているのである。

ふつうジェントリフィケーションは、もつと狭い意味で理解されている。つまりこの語は住宅供給、とりわけ専門職や管理職に就く中産階級のメンバーの「ダウンタウンにおける」住居選択に関して用いられており、その選択も通常個人主義的な観点から説明されている。しかしながら、ジェントリフィケーションという種別的な空間的プロセスを作り上げるささいな出来事や個人的な決定は、より大きな社会変容によって育まれる。それぞれの近隣地区はジェントリフィケーションの経験について、それぞれの物語を持つている——しかしボストンのサウス・エンドにせよ、カンサス州のクオリティ・ヒルにせよ、シカゴのグース・アイランドにせよ、それぞれのダウンタウンが「再活性化された」地域を有するという点では変わりはない。地誌、ビルディング・ストック、さらにそこに生きる人々にさえおかまひなく、ジェントリフィケーションは、集合的な営為として、新たな都市中間層を満足させるためにあくまで中心を領有しようとする。

ジェントリフィケーションを進める人々を「都市「再生」のパイオニア」であると見る見方が、中産階級による中心の専有をイデオロギー的に正当化しているのだということを見誤ってはならないだろう。一九世紀における白人入植者がアメリカ先住民を先祖代々の土地から立ち退かせたのと全く同じ様に、ジェントリフィケーションに関わる人々、開発業者たち、そして新たな商業的利用は、すでに人々が居住していたダウンタウンの「フロンティア」辺境」を押しやった。ジェントリフィケーションによる領有は、ビジネスサービスの雇用と設備がローカルな範囲で拡大していることと、論理的には十分に結びついている。これらの雇用の一部は中心から郊外へと流出しているものの、都市経済全体としては金融、エンターテイメント、ツーリズム、コミュニケーションそしてこれらのビジネスを支える業種へと移行していつている。しかし企業の拡張やジェントリフィケーションは、都市経済の全般的な衰退、平均世帯収入の減少、さらに収入の不均等といった全般的傾向には知らん顔で通してきた。代わりに、ジェントリフィケーションは、「衰退する海における島の再生」といったものを創造しながら、景観と土着のものを新しく並置することを助長して、不平等をより可視的にしている。

中心部における住宅投資の再開は、一九四五年（より正確には一九二九年）以降の資本の撤退に関わっている。こ

れによりジェントリフィケーション可能なビルディング・ストックが手に入るようになった。しかしそれは、文化変容によって形成された、そのようなビルディング・ストックに対する需要を反映してもいる。この需要の方はというと、高等教育を支える「再帰的」消費と、それにもなう高級文化と流行のスタイルに対する消費者の増加を表している。すなわちこれらはジェントリフィケーションを進める潜在的勢力なのである。

ジェントリフィケーションによる民間市場への投資は、効果的に中心部を「刷新」する役割を担っていた。それは都市の再生をめざす行政の計画が連邦政府の基金を使い果たし、あらゆる人種・階級からの支持が無くなったまさにその時に行われたのだった。さらに、ジェントリフィケーションでは、相続財産、家族ローン、個人貯蓄、そして人々が再生をめざして無償で働くことによる資産価値の上昇といった非制度的形態の資本がしばしば用いられた。こうして、ジェントリフィケーションは、ダウンタウン開発の様式的変容——公共部門から民間部門へ、大規模なプロジェクトから小規模なプロジェクトへ、新たな建設から修復へと資本投資の財源の変容の両方をもたらしした。

同時に、資産価値の周期的な衰退と脱工業化の長い構造的プロセスの結果、中心都市の政治経済全体が変化つつあった。巨大な製造業者は、建築物と密集した街路の重層的配

置が機能面で時代遅れであるとして、一八八〇年代以降都市中心地の外側へと移動した。生産過程の水平的配置に関わる部門、すなわちトラック運送業、自動車通勤といったものに依存しながら、製造業は郊外の未開発地域に工場を置くことを選んだ。郊外の低い地価、税金、賃金もまた魅力的であった。しかし、中心地に残った小さな製造業者——一九世紀後半に建てられたダウンタウンのロフトビルに密集していた——は、低い地代しか払っていなかったために、存在自体が古臭いようにみえた。それらの業者は、一九六〇年代を通じて海外との競争や輸入の拡大によって大きな痛手をうけてきたが、アパレル産業や印刷業といった都市中心部で活動をする産業は、消費者、ライバル業者、納入業者に近い低地代地区で生き延びていた。ダウンタウンや中間地区のマンハッタンと、低賃金でしばしば移民やマイノリティの労働者が生活するより離れた労働階級地区とを結ぶニューヨークの主要交通網からも、それらの業者は恩恵を受けていたのである。

こういった経済的な活力やダウンタウンとの歴史的な結びつきにもかかわらず、製造業者らは生き延びるのによつとの状態であった。彼らは名士の地主、公選の委員、不動産開発業者といった新たに勃興してきた者たちからはもぐりとみなされていたのだ。社会的に時代遅れであったもことから住んでいた地元の人々は、経済的権力が創り出す

景観の展開にとって障害であった。一九六〇年代における都市再生プログラムと郊外における新たなオフィスの建設に際して、多くの都市の行政当局は、企業ビジネスや金融業界とあらたな連携を始めた市長たちに従うことになった。例えばニューヨーク市のジョン・リンゼー市長は、市当局がニューディール政策以来培ってきた中小企業や労働組合とのつながりを断ち切り、それより不動産開発業者を含む金融部門にいい顔をすることにした。リンゼー市長以降、歴代の市長が支持してきたのは、ダウンタウン・マンハッタンに広がるサービス部門だけにあからさまな関心を払いつつ経済成長をもくろむ仕組みであった。

企業がダウンタウンに立地する必要や希望を持っていたことを考えれば、当時の地価はそうした企業にとって相対的に低かったはずである。「地代格差」は中心地における経済的価値の周期的な損失を反映しているが、民間企業——主に銀行や保険会社、外国企業の支社、金融サービス業——の中には、ダウンタウンという立地条件が持つ象徴的価値ゆえに意識的にそこにとどまるものもあった。とはいえ、ダウンタウンが「上流階級による」利用を完全に排除してしまうことも決してなかった。ボストンのバック・ベイやビーコン・ヒル、フィラデルフィアのソサイエティ・ヒルやリッテンハウス・スクエアには、ごく少数の名門一家がずっととどまっていたのであった。こうした少数の地

域は、経済的・文化的価値を決して失うことなく、中心地における「再活性化」の足掛かりとなった。

一方では再開発に向けた契約に、他方では資産価値に注意を払いながら、ダウンタウンに土地を所有する名家の人々は、経済的価値を増大させる新しい開発方法を指揮するのに理想的な立場にいた。こうした人々はまた、資本投資の元手、市の行政当局による許認可、文化的正統性なども意のままにしていたが、それは彼らが銀行の方針、都市計画委員会、地元の歴史ある社交界を形づくってきたためである。こうした彼らのコネクションは、土地利用を大規模に転換するために欠かせないものであった。とはいえ、ニューヨークは例外であったといえるかもしれない。というのも、一九七三年になるまで、ダウンタウン・マンハッタンにおける資産家たち——現在は高級住宅地か郊外で生活している——は、新しいビルや高速道路の建設を迫ることしかなかったからである。

しかし、フィラデルフィアではソサイエティ・ヒルの上流階級の住民たちと、銀行業界や市当局にいた彼らの知己とが、一九五〇年代後半に保存を中心とした再活性化に際して見事に協調した取り組みを開始した。エルフレス小径の家屋見学ツアーからはじまったが、近隣地区にあるスラムのクリアランスや新たな商業施設建設のために政府から補助金を得るまでになった。二〇年後、独立記念日の二〇〇

年式典に合わせるかのように、デラウェア川のウォーターフロントにほど近いダウンタウンにある、彼らのエンクレーヴ化された居住地区は、歴史遺産の保存や観光用、また保険会社や金融サービス企業の新しいオフィス用といった広大な地域に囲まれることになった。すぐ近くのクイーン・ビレッジでジェントリフィケーションが行われたのも偶然ではなかった。フィラデルフィアにおけるジェントリフィケーションの結果、製造業を含む小規模な事業者や、労働者階級の中でもとくにイタリア系やプエルトリコ系の住民が居場所を奪われたのだった。

対照的に、一九七〇年ごろからのマンハッタンにおける、低地代や「社会的にみて時代遅れの」空間利用からの転換は、文化をめぐるポリティクスに関わって生じたものであった。特にダウンタウン・マンハッタンの景観は、芸術家と歴史的建造物の保存を求める人々との共闘がもたらした予想外の勝利によって形作られたのであった。文化生産者が低地代の製造業者向けロフトビルに住み着くようになってきた生活と仕事の場を守るために、彼らによる組織が結成され、金もうけをもくろむ一味によってその地区が取り壊されることに反対した。文化生産者たちはまた、自らがどれほどニューヨーク市の経済に貢献してきたかということとを盾にして、もっぱら製造業者向けに区画された建物で生活し仕事をするこの法的正当性を主張した。一九六〇

年代以降、前衛的なアートやパフォーマンスのジャンルは、かつてより広がりのある、お金を払ってでもそういったものをみようとする観衆を引きつけていた。新種のアートが次第にダウンタウンのロフトビルに集中していくにしたがって、そこはダウンタウンにおけるアートの経済と結びついていった。

ダウンタウンの空間をめぐる、アーティスト、製造業者、不動産開発者の間での競合関係は一九七三年まで続いたが、そこからアーティストたちが勝ち残ることになった。しかし既成勢力との強力な連携がなければ、アーティストたちもロフトビルで生活する権利を勝ち取ることはできなかったであろう。つまり、彼らの政治戦略はアーティスト層の存在感が見えて大きくなってきたことだけを頼みとしたものではなかった。彼らの戦略は、場合によっては金もうけをもくろむ一味を支持したかもしれない土地持ちや行政を握るエリートからの支持にもかかっていた。歴史の保存という文化的価値やアートの市場価値の上昇に守られながら、ダウンタウン・マンハッタンのロフトビルは軽工業地区から文化地区へと変容した。このプロセスがジェントリフィケーションと同時に進行していたということがわかるのは、後になってからである。ダウンタウン・マンハッタンでの「ロフト暮らし」の正統化プロセスは、景観の物質的な変化と同時に象徴的な変化をも示していた。明

らかに「下から」解放された資本のフロアによって製造業のような「時代遅れの」空間利用が一掃されると、それに代わってダウンタウンの空間は視覚的・感覚的な面から、さらにはコンセプトの面からさえも新しく方向転換していくことが必要となった。ダウンタウン開発の新たな様式が「一九七三年以降の」新たな生産の編成を反映しているのとまさに同じように、ジェントリフィケーションを進めたアーティストたちの文化的実践もまた新たな消費の編成に関わっていたのであった。

当初、ジェントリフィケーションに関わる人々が歴史的な様式の保存・復興を好んでいたのには、十年以上続いた公的補助による都市再生や民間の商業的再開発に対して彼らが心底失望していたことがあった。これらはともに、多くの都市で建築遺産のかなりの部分を破壊していたのである。たとえば『失われたニューヨーク』という写真展（一九六三年開催）とそれをまとめた写真集（一九六七年刊）は、黄金期から第二次世界大戦までのダウンタウン・マンハッタンの特色であった立派な石碑、石造建築、铸铁建築を詳細に記録していた。ダウンタウンの商業機能がより北へと移ったのに続いて行われた再開発の時期に、これらの建築物のほとんどは取り壊されてしまった。長い間、古い建物を壊すことは、よりよくなるということと同義であった。しかし一九六〇年代初頭に偉大な時代の鉄道ター

ミナルであるペンシルバニア駅が解体され、高くそびえるガラスのドームが殺風景なオフィスビルに取って代わられると、多くの人々が感じていた集合的な時間の感覚が失われたことは誰の目にも明らかであった。

『失われたポストン』、『失われたシカゴ』、『失われたロンドン』へと展開していく写真展には、すべてをなぎ倒して新しい街を作り上げていく都市再開発の戦略に対する、おおよそあらゆる方面からの不満が映し出されていた。美学から社会学にまでわたる再開発への批判が行われた。ジャーナリストのジェーン・ジェイコブスは、社会の多様性を促進するという理由で、従来の建築を保護することを唱えた。彼女の一家はグリニッジ・ビレッジの最も古い、居住地区と工業地区とが混在する地域に移り住んでいた。ジェイコブスは小さくて古いビルの安い地代と、近隣の人々との気の置けない暮らし、安売り店をして新たな奇抜な経済活動とを結びつけた。これらは別言すると、ダウンタウンの社会的価値とでもいふべきものであった。さらに、社会学者のハーバート・ガンズとマーク・フリードの研究によれば、物理的には荒れ果てたインナーシティのコミュニティさえ、その住民にとっては社会的価値をむしろ回復していることが示された。

中心部において新たな住宅取得の費用が上昇し、住宅の供給量も不足するという動きは、ダウンタウンの価値を再

発見するというこの感覚に結びついたものであった。かたや、ジェンダー間の平等やそれぞれが独立した稼ぎ手である世帯のような新たなパターンが現れてくると、良い学校、良いスーパーマーケットや商店の近くに家がある方がよいとするかつての要求は、少なくとも子供を持たないかあるいは私立学校に通わせるのに十分な資産を持つ家庭にとつては、あまり重要ではなくなった。こうした人々はパーク・アベニューに住む余裕がなかったし、かといってアップパー・イースト・サイドに住むのは死んでもいやだった。そこで高学歴の上層中産階級の居住者は、中心部を社会的・審美的卓越性を有する場所としてとらえ直すことにした。同様に、十分に教育を受けているが低収入の居住者——とりわけ文化志向のキャリアを選んだ人々や単身で生活している人々であり、多くの女性やゲイを含んでいる——は、雑多な特色の集まった場所として中心部をとらえた。ダウンタウンの「時代遅れ」の地域における相対的に安価なビルディング・ストックは、さまざまな社会集団に対して新たな文化的消費の機会を提供したのであった。

新たな中産階級の居住者は一九世紀に建てられたダウンタウンの家を買う傾向があった。何度も上から塗り直され、修復が行われ、間取りが変更されることで覆い隠されたディテール、つまり度重なる修繕の中で失われてしまった建築的なディテールを入念に復元していったのである。

こうした中産階級の存在を、一九六〇年代初頭ロンドンのインナーシティ地区へ流入してきた「ジェントリー」として初めて明らかにしたのは、イギリスの社会学者ルース・グラスであった。新たな住民は上流階級並の収入があったわけではないものの、もともとそこに住む労働階級の人々よりもあきらかに裕福で高学歴であった。都市の中心近辺の荒廃した地区にある古い家屋の一体何がこうした人々を引きつけているのか、以前からの住民にはほとんど理解できなかった。しかしそれ以降、ジェントリフィケーションをもくろむ人々は、先進国世界の従来の都市すべてに著しい広がりをもせ、彼らの文化的嗜好が近隣地区再生や都市計画の公的な規範と化していったのである。

歴史的建造物と小規模の街区のまとまり感を尊重しながら、ジェントリフィケーションは再発見として、つまり場所の価値を再び取り戻す試みとして登場した。中心部にある古いビルの審美的価値やその建築をめぐる歴史的経緯を正當に評価することによって、それは戦後の郊外にみられた体制順応主義やキッチュといったエートスを超越するよゆうな、文化的感性と洗練度を示していたのである。その上、社会の多様性を探し求めてダウンタウンへ移り住むことは、「ホワイト・フライト」[とりわけ白人による郊外への転居]やインナーシティからの投資の引き揚げとは相容れないであろうりべラるな寛容性の表明ともなった。経済資本より

もむしろ文化資本を基盤とした社会空間ないしハ・ビ・ト・ウ・スを構築することで、ジェントリフィケーションは二種類の矛盾を和解させた。まず景観と土地固有のものとの矛盾は、ジェントリフィケーションに関わる人々が、伝統的に景観を眺めるときに用いられてきたのと同じ審美的・歴史的パースペクティヴを通じて、荒廃した都市の土地固有の建造環境を眺めることで解決された。さらに市場と場所との間の矛盾については、古いビルを保存しようとする彼らの要求——経済的価値よりも文化的価値を尊重することによる——が、結果的に場所の特性に合わせた市場の構成を助けることで解消されたのである。

しかしながら、ダウンタウンの性質が変化するにつれ、ジェントリフィケーションの性格も変わっていった。かつてはそのトレードマークであった古いビルへのこだわりも、一九八〇年代初頭以降、大量の新たな建設計画と結びつけられていった。金融地区周辺の商業・住居施設——ロンドンにおけるドックランドもしくはニューヨークにおけるパットリー・パーク・シテイなど——は、ジェントリフィケーションを進めた人々が「開拓した」古いビルやダウンタウンの多様性に対する嗜好を利用してしているのである。しかしその成功のために、われわれはジェントリフィケーションというものが、そもそも社会的現象なのか、あるいは審美的現象なのか、それとも空間的現象なのかということをも

はや判別することができないのである。

中小の不動産開発業者は、次第に場所を目玉にした物件を売り出すチャンスに気づくようになった。「人目を引き、なおかつ戦前の建物のようにしっかりと建てられた、プレステージを感じさせる物件が見つかるでしょう」というのは、ある住宅開発業者の言葉である。この業者は、ダウンタウン・ブルックリン近郊のさまざまな人種の混住する地区にあったネオゴシック様式のカトリック神学校を、豪華なマンションに改築した。「問題がないとはいえない地区ではありますが、当物件は公園、カレッジ、主要交通機関からほど近いところにあります——中産階級のお客さまが住みたくなるような条件です。お客さまが入居されるころには、周辺ビルの修復も始まっていることでしょう」。

ダウンタウンのロフトビル地区は特別なものとして、より種別化された不動産市場を形成した。芸術家がそれに関わっているとだけで、現存するロフトビルは「本物の」文化的消費の_AURAをまとったのである。芸術家が「フルタイムの遊びのプロであり、彼ら以外のパートタイムの消費者がいだく感官的な願望を刺激し形にする審美的テクニシャン」であるとすれば、芸術家のロフトビルやその周辺の地区は、新しい再帰的消費にうってつけの場所になるというわけであった。

市場は、ダウンタウンの空間をめぐる景観対土着のもの

という競合関係を調停するだけではない。次のことは重要である。つまり従来からの土地利用者——たとえば労働者階級の住民や小規模製造業者——の社会的価値は、ジェントリフィケーションの潜在的な支持層の文化的価値に比べ、中心に対して訴えかける力が弱いということである。ジェントリフィケーションは、経済的要請と文化的主張とを結びつけている。この文化的主張は、歴史的景観の保存の専門家やアートの製作者らの要求を最優先する。こう考えると、「歴史的な」建造物の価値が余すところなく評価されるのは、それらが建築史や芸術史といった審美的な言説の一部として説明され、分析され、理解されるときに限られるということになる。そのような建物は、建設当時の設計プランを探したり、建築家の経歴に照らして自分の家を調べたりするのに十分な文化的資源を持っている人々が自ずと「所有する」ことになる。それらの建物は、アルミニウムの羽目板を選ぶ「文化的資源を持たない」従来の住民ではなく、マホガニー材の羽目板を復元し一九世紀の水道蛇口の複製品を購入する住民たちのものなのである。

ジェントリフィケーションを進める人々は、自分たちを歴史と一体化させる能力によって、自らの利用法にかなう形でダウントウンを「再生」する認可を自身に与えている。とにかく彼らの大半は、地元の労働者階級向け酒場が「古きよき時代の」バーや「フレンチ」のビストロに変わって

いくことを嘆き悲しむ傾向など持ちあわせていない。ビルディング・ストックを通じて、彼らは、現在そこに住む低所得層ではなくむしろ建設当初の所有者に自分を結びつけ、またデイスカウント・ストアよりも、それに取って代わられた今はなき二〇世紀初頭の百貨店「レディース・マイル」に自分を重ねあわせるのである。

彼らが中心になって地区の再生や住民の教育にかなり力を注いだおかげで、取り壊されるはずだったエスニック・ゲットーや労働階級地区といった都市に土着のものは、ジョージ王朝様式、ビクトリア様式、あるいは初期の産業景観として再一発見され、保存に値すると判断されるようになっていく。「この新たなまなざしによれば、(ジェントリフィケーションされた地区)は、文字どおりの場所というよりも、現代のインナーシティのうんざりする現実とその地域の過去の想像的再構築との間の文化的往還が行われる場ということになる」(パトリック・ライト)。

都市空間に対する文化的な主張は、住宅が「自分に購入可能かどうか」という低所得者層がこれまで掲げてきた問題設定に代わる、新しい正統性の規準を提示している。今や文化的価値は経済的価値と分かちがたく結びついている。ロフト暮らしやジェントリフィケーションに対して高まる需要を受け、大土地所有者、開発業者そして公職にある人々たちは、文化的消費の対象を供給することによって中心地

の経済的価値を強化できるということに気づいたのであった。³⁾

多くの事例において、政府による介入は、ジェントリフィケーションを進める「市場の力」が頼りにする文化的主張を支援してきた。新しいゾーニング法は、製造業者たちを中心部から追放した。彼らは郊外に移転することを余儀なくされている。さらに一九八一年以降、合衆国の税制は、歴史的建造物を再生するためなら税金の分納を認めてきた。税制改正法についても、一九八六年には控除の上限を引き下げられ、資格審査も厳しくなったとはいえ、歴史的建造物保存向けの税控除制度を残した。「ランドマーク」となる建造物や地区に当局がお墨付きを与える手続きはいまやあらゆる都市にあり、その手続きの際には、当時の歴史的様式のまま建物を維持管理していく経済的余裕のある人だけにそこでの居住を許可する傾向がみられる。しかし、中心部の経済的価値を回復させるひとつの戦略として、ランドマーク化が有効性を失った——ニューヨーク市においては一九八〇年代半ばまでに実際にそうなってしまった——ときには、地方行政当局は手のひらを返し、歴史的建造物保存という考え自体を攻撃対象にすることもできるのである。ジェントリフィケーションが政府から受けている最大の援助は、特別な助成金によるものではなく、政府が先にみたような文化的主張を実質的かつ象徴的に正統化している

事実に由来するものだった。このお墨付きによって、文化生産者は都市の成長のシンボルに担ぎ出された。街路に面したアート・ギャラリーや「フレンチ」のレストランは個々の地区におけるジェントリフィケーションの最前線および情報発信地になる一方、労働人口中アーティストが最も高い割合を占める都市はまた、最も高い確率でダウンタウンのジェントリフィケーションやコンドミニアムへの転用が行われる都市でもあった。

しかし、ジェントリフィケーションの審美的な魅力は、「その理解者を限定しているという点では」選別主義的であると同時に柔軟でもある。その魅力は、文化的消費の対象となる商品の中に取り入れることのできるものであった。ただそうしてできた商品はというと、もともとそれが生産されていたダウンタウンとはほとんど関わりをもたないものである。ポリオ・デイリー・プロダクツ社が一般市場向けに売り出した新ブランドの「新鮮な」チーズの広告には、次のように書いてある。「わが社のフィオル・デイ・ラッテの登場以前には、出来たてのモッツァレラチーズをかうために、イタリア人地区にある『ラッティチーニ』（乳製品店）にまで行かなければなりませんでした。その店主たちは毎日、おいしいホワイトチーズを作り、減塩水の入った樽でそれを新鮮に保存していました」。ここで重要な点は、イタリア伝統の味を楽しむのに、いまではわざわざ彼

らの地区にまで買いに行く必要がないということである。すなわちグローバル貿易や大量流通システムのおかげで、伝統にのっとった「本物の」味を再現できるのだ。広告はこう続ける。「新鮮なモツアレラの繊細な手作りの香りを保つために、ポリオ社ではイタリア直輸入の製法と設備を用いております。さらに、水分と新鮮さを二五日まで保つため、フィオル・デイ・ラツテはそれぞれのお客様ごとにパックして販売させていただいております。新鮮なモツアレラがスーパーマーケットで売られるのなら、「ラツティチーニ」はお役御免というわけである。

このように、ジェントリフィケーションが生み出した消費の構造は、ダウンタウンの空間に皮肉な結果をもたらす。当初、場所の文化的価値は、そこにしかない特別なものとして扱われるのだが、結局は市場文化によっていいとことどりされてしまうのである。

註

(1) 私がこれを書いた直後、『ニューヨーク・タイムズ』の社説は、「ニューヨーク市の中心的なビジネス地区はついに、すべてのニュー Yorker の便益のためにイーストリバーを越えてダウンタウン・ブルックリンへと向かっている」と言明した(一九八九年三月一九日付)。続けて社説は、ブルックリンのウォーターフロントからそれほど離れていないところであって、新た

に官民一体で進められているメトロテック副都心開発地区に、セキュリティ産業のコンピュータ・オペレーション・センター用として広大な敷地を賃貸した行政当局者たちに賛同の意を示している。

(2) ジェントリフィケーションを含むあらゆる新しい民間部門による資本投資にとって、人種はもっとも深刻な障害となっている。一九七〇年代を通して、住宅価格が上昇し続け、住宅供給はその需要に応じたペースを維持できなかったため、ジェントリフィケーションに関わる白人は非白人地区へと「より大胆」に移っていったし、もしくはその種の居住지가課税セキュリティやサービスの費用に対してより寛容となった。ジェントリフィケーションが有色の人々を追いつけず危険を冒すとき——特にハーレムにおいて——だけが、まさに人種をめぐる障害を流動化させるチャンスとなる。その時でさえ、産業移転の場合と同様に、追い出された犠牲者たちは、立退き料を請求できるか、新しい建築物——この場合建て替えられた住宅ストック——の所有権を手に入れることを許されていた。

(3) しかし、新たなプロジェクトへの投資が見込みのあるときには、中心への経済的要求は文化的主張に優先する。香港での歴史的建造物保存運動の完全な失敗は、この法則を証明した例である。「香港での建造物の破壊は、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ローマのいずれの都市においてもこれまで認められるはずのないものだった」。建築家が香港のヘリテイジ・ソサエティの設立者であるデヴィッド・ラツセルは言った。三つの主要な保存運動で続けて敗北してから五年後、その組織は解散した。「ニューヨーク・タイムズ」一九八八年三月三十一日付。